第 170 回
日耳鼻長崎県地方部会学術講演会
【プログラム・抄録集】

令和 4 年 12 月 10 日（土） 15 時 00 分～

ご案内

昨今の新型コロナウイルス感染症の事情を鑑み、Zoom を使用したオンライン開催とさせていただきます。

【注意事項】

1. ご自宅、ご自身の診療所など通信環境の整った場所からのアクセスをお勧めします。可能であれば有線 LAN でのご利用をお勧めします。
2. 会員以外のアクセスを防止するため、ID やパスコードを他人に教えないでください。
3. 講演会の録画は固くお断りいたします。
4. 出席は端末のアクセス履歴で確認いたします。基本的には一人一端末でご参加ください。
5. 講演会の間、ご自身の端末のマイクとカメラは off にしてください。発言がある場合は挙手していただき、司会・座長から指名されたらマイクとカメラを on にしてご発言ください。
6. 音声が聞こえない、画像が見えないなどトラブルがありましたら、下記までご連絡ください。

【連絡先】

長崎大学耳鼻咽喉科学教室：095-819-7349

演者の方へ

【発表時間】1 題 10 分（発表 7 分、質疑 3 分）時間厳守

発表の際には司会・座長の指示に従って、マイクとカメラを on にしてください。

【会長挨拶】15:00～15:05 熊井良彦（長崎大学）

【一般演題】

第Ⅰ群：15:05～15:35 座長　木原千春（長崎大学）

Ⅰ-1　当院における気管切開術の手術時間ならびに術後の転帰についての検討
松井彰子（長崎医療センター）

Ⅰ-2　喉頭病変を伴った Crohn 病の一例
髙村　幸（長崎大学）

Ⅰ-3　診断に難渋したメトトレキサート関連リンパ増殖性疾患の一例
澤瀬光佑（長崎大学）

第Ⅱ群：15:35～16:05 座長　久永将史（嬉野医療センター）

Ⅱ-1　当院で施行した内リンパ水腫画像検査（内耳造影 MRI）について
北岡杏子（長崎原爆病院）

Ⅱ-2　当科における 2021 年と 2022 年のスギ・ヒノキ花粉症
野田哲哉（野田耳鼻咽喉科）

Ⅱ-3　新型コロナ後遺症に上咽頭擦過療法 EAT と投薬にて改善した 16 症例
佐々野利春（ささの耳鼻咽喉科クリニック）

【長崎県耳鼻咽喉科病診連携研究会総会】16:05～16:35

司会　長崎県耳鼻咽喉科病診連携会長　野田哲哉

会計報告　　西　秀昭（長崎大学医局長）

【連絡事項】　　木原千春（長崎大学）

【一般演題　第Ⅰ群】

Ⅰ-1　当院における気管切開術の手術時間ならびに術後の転帰についての検討

〇松井彰子、小野晋太郎、松本浩平、田中藤信
長崎医療センター　耳鼻咽喉科

【はじめに】耳鼻咽喉科医にとって気管切開術は基本的な手術手技のひとつである。しかし、その習得には一定の経験が必要であることは言うまでもない。手術経験数および臨床経験年数と手術時間についての関連を検証した。
また、気管孔の瘻孔化が完了した後の管理は主科に依頼することが多く、その後の転帰を知る機会は少ない。気管切開症例を追跡し、閉鎖の有無を検討した。
【対象・方法】2022 年 4 月 1 日～10 月 4 日の期間に当科で気管切開を施行した 36 例（脳神経疾患 22 例、消化管穿孔 5 例、肺炎 4 例、外傷 2 例、その他 3 例）を対象とした。執刀開始～カニューレの結紮固定終了までを手術時間として、専門医、非専門医（専攻 2 年、専攻 4 年）の手術時間を比較した。また、各症例の転帰を追跡した。
【結果】執刀症例数は専攻 2 年の医師が 17 例、専攻4年の医師が 12 例、専門医が 7 例だった。手術時間の中央値はそれぞれ 28 分、21 分、19 分だった。専攻 2 年の医師の執刀症例を前期 9 例、後期 8 例に分け検討すると、有意差はなかったが手術時間の中央値は 29 分から 27 分に短縮していた（p＝0.308）。
気管切開後の症例を追跡すると、気管孔を閉鎖できたのは 7 例で、その転帰は転院 6 例（脳神経疾患 4 例、肺炎 1 例、消化管穿孔 1 例）、入院中1例（声帯麻痺 1 例）だった。平均年齢は 66.7 歳だった。閉鎖未実施が 29 例で、その転帰は転院 11 例（脳神経疾患 10 例、消化管穿孔 1例）、自宅退院 1 例（下咽頭癌）、死亡 6 例（消化管穿孔 2 例、肺炎 1 例、外傷 1 例、CPA 蘇生後 1 例、下咽頭癌 1 例）、入院中 11 例（脳神経疾患 5 例、肺炎 3 例、外傷 1 例、肺癌 1 例、腸管壊死 1 例）だった。平均年齢は 70.2 歳だった。
【考察】有意差はないものの、専攻 2 年目医師は 17 例の執刀で手術時間の短縮を認めた。また、専攻年数に比例して手術時間が短くなる傾向を認めた。藤原らは、甲状腺葉峡部切除術において、手術経験数が 45 例を越えると初期の約 2/3 の手術時間で安定すると報告している。異なる術式であり一概に比較はできないが、気管切開術の習得にも同様の習熟傾向があると考えた。
気管孔を閉鎖できたのはわずか 17%の症例だった。また、気管孔が開存した状態で耳鼻咽喉科医のいない後方病院へ転院していた症例が散見された。転院先での経過は不明だが、これらの症例は今後も閉鎖の予定はないと考えられる。今回の検討では、閉鎖不能群の平均年齢が高かったが、その他にも要因が明らかになれば、輪状軟骨鉗除を行う気管切開術・気管皮膚瘻形成術の適応を適切に判断できるかもしれない。

Ⅰ-2 喉頭病変を伴った Crohn 病の一例

〇髙村 幸、西 秀昭、熊井良彦
長崎大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

【はじめに】Crohn 病は口腔から肛門まで消化管のあらゆる部位に線維化や潰瘍病変を伴う肉芽腫性病変が起こりうるが、喉頭病変に関しての報告は少ない。Crohn 病の喉頭病変と思われる喉頭蓋の潰瘍性病変と浮腫に対して、Crohn 病の治療を強化したことによりその改善を得た一例を経験したので報告する。【症例】30 歳男性【現病歴】6 年前に下痢で発症し下部消化管型の Crohn 病の診断となり、アザチオプリン、メサラジン、インフリキシマブにより維持療法中であった。当科受診 2 週間前より咽頭痛を自覚し、前医を受診した。急性喉頭蓋炎が疑われ、同日当科紹介となった。3 ヶ月前にも同様の症状で近医入院歴があった。【入院時所見】体温 37.0℃、SpO2 98%(room air)、喉頭蓋の緊満性腫脹と白苔付着が認められた。声門上・声門下の浮腫はなく、声帯の可動性は良好であった。血液検査では WBC 6400 / μL、CRP 4.88 mg/dL と軽度の炎症反応上昇を認めた。【経過】混合感染の急性喉頭蓋炎としてデキサート＋セフトリアキソンでの加療を行い、喉頭蓋の浮腫の改善を認め入院後 6 日で退院した。ところが咽頭痛が再燃し退院 8 日後に緊急入院となった。再入院時の血液検査は WBC 6500 / μL、CRP 0.67 mg/dL、喉頭蓋の腫脹は再燃した。Crohn 病との関連を考え、消化器内科へ相談した。下部消化管内視鏡検査で S 状結腸に縦走潰瘍、直腸にも skip した線状びらんを認め、Crohn 病の活動性が持続していることがわかり、プレドニゾロン 40mg 内服が開始された。ステロイド漸減後も症状の再燃なく経過した。【考察】Crohn 病の約 1 割に頭頸部領域の病変を伴うと報告されている[1)]。今回、反復する喉頭蓋炎に対し、Crohn 病の治療強化により喉頭病変の改善を得ており、喉頭病変を伴った Crohn 病と考えた。Crohn 病患者の反復する喉頭蓋炎では、下部消化管内視鏡検査などで原疾患の病勢を評価する必要がある。

【参考文献】

1) Rehberger A.,et al.: Crohn's disease masquerading as aphthous ulcers. Eur J Dermatol 1998;8:274-276.

Ⅰ-3 診断に難渋したメトトレキサート関連リンパ増殖性疾患の一例

○澤瀬光佑、大野純希、副島駿太郎、山本昌和、西　秀昭、熊井良彦
長崎大学病院　耳鼻咽喉科・頭頸部外科

【はじめに】メトトレキサート（MTX）は関節リウマチの治療薬として広く使用されるが、リンパ増殖性疾患の原因となることがある。初診時に MTX 内服が確認できなかったため診断に難渋した MTX 関連リンパ増殖性疾患の一例を経験したので報告する。

【症例】78 歳男性【現病歴】受診 1 ヶ月前からの咽頭痛を主訴に前医を受診した。左扁桃に壊死を伴う腫瘤性病変を指摘され当科に紹介された。【検査所見】血液検査：WBC 5700 ／μL (Seg 80.2%、Lymph 14.9%), CRP 2.23 mg/dL, sIL-2R 920 U/mL、病理検査（中咽頭腫瘍から生検）：EBER, CD20, CD79a が陽性【経過】壊死を伴う腫瘤性病変で著明な炎症所見もないことから悪性腫瘍の可能性を疑った。病理所見からは DLBCL・Hodgkin リンパ腫・Burkitt リンパ腫が鑑別に上がったが、診断確定には至らなかった。精査を行う過程で腫瘤は無治療で消失し、その後も再発なく経過した。確定診断には至らずに退院後 3 ヶ月で経過観察を終了した。経過観察終了から 10 ヶ月後に右耳下部の腫瘤を主訴に再度当科を受診した。この時点で関節リウマチの既往があり、初診より前から MTX を内服していたことが判明した。この内服歴を鑑みて、MTX 関連リンパ増殖性疾患を疑い、MTX を休薬した上で経過観察したところ腫瘤は再度自然に消失した。

【考察】MTX 関連リンパ増殖性疾患は MTX 投与中に生じるリンパ増殖性疾患である。頭頸部領域では扁桃、咽頭などワルダイエル輪での発症が最多であり、口腔、鼻腔、甲状腺、唾液腺での発症も報告されている [1)]。診断には病理検査が必要であるが、組織像は多彩であり [2)]、診断に難渋する例も報告されている。EB ウイルスとの関連も指摘されており、後方視的に検討すると初診時の病理像で EBER 陽性であったことは MTX 関連リンパ増殖性疾患として矛盾しない所見であった。本症例は初診時に MTX 内服歴が確認できなかったことで診断に難渋したが、腫瘍診断における詳細な問診、患者背景把握の必要性を再認識した一例であった。

【参考文献】

1)Hoshida Y.,et al.: Lymphoproliferative disorders in rheumatoid arthritis: clinicopathological analysis of 76 cases in relation to methotrexate medication. J Rheumatol 2007;34:322-331.

2)Ichikawa A.,et al.: Methotrexate/iatrogenic lympho-proliferative disorders in rheumatoid arthritis: Histology, Epstein-Barr virus, and clonality are important predictors of disease progression and regression. Eur J Haematol 2013;91:20-28.

【一般演題　第Ⅱ群】

Ⅱ-1　当院で施行した内リンパ水腫画像検査（内耳造影 MRI）について

〇北岡杏子、隈上秀高
長崎原爆病院　耳鼻咽喉科

メニエール病の病態は内リンパ水腫とされおり、近年、内耳造影 MRI により内リンパ水腫の描出が可能となった。当院でも 2021 年 7 月から内リンパ水腫画像検査（内耳造影 MRI）を実施しており、これまで経験した症例について報告する。2021 年 7 月から 2022 年 10 月の期間中、検査を実施した症例は 28 例で、女性が 26 例、男性が 6 例、平均年齢は 57.4(16～81)歳であった。検査前の推定患側は右が 10 例、左が 11 例、両側 2 例、患側不明が 1 例、その他が 5 例だった。推定患側と画像の患側の一致率は 79%であった。一致しなかったものの内訳としては両側を疑ったが片側だったものが 1 例、患側不明だったが両側だったものが 1 例、左右の不一致が 2 例、疑っていたが画像上内リンパ水腫の描出がなかったものが 1 例であった。また、検査前には他疾患を疑ったが、患者の希望もあり撮像した 4 例では全例内リンパ水腫はなかった。全症例中、検査結果を参考にして内リンパ嚢開放術を施行した症例は 5 例であった。手術を行った 5 例のうち 4 例は MRI で指摘された内リンパ水腫側と同側の手術を行い、1 例は聴力の変動や眼振所見から MRI では内リンパ水腫の描出のなかった対側を手術した。内リンパ水腫画像検査（内耳造影 MRI は、メニエール病の診断の一助となり、特に患側や手術側の決定に有用であるが、病歴やその他の臨床検査所見も合わせて総合的に診療を行うことが重要と考えた。

【参考文献】

1)Nakashima T.,et al.;Grading of endolymphatic hydrops using magnetic resonance imaging, Acta Otolaryngol 2009;Suppl:5-8.
2)Nakashima T.,et al.: Visualization of endolymphatic hydrops in patients with Meniere's disease. Laryngoscope 2007;117:415-420.

Ⅱ-2　当科における 2021 年と 2022 年のスギ･ヒノキ花粉症

〇野田哲哉
野田耳鼻咽喉科

当科では毎年、スギやヒノキ花粉が飛散する 2 月～4 月に外来患者が多くなる。しかし、2021 年と 2022 年ではスギとヒノキの花粉飛散数が大きく異なっており、患者数に興味深い違いが認められたので報告する。

両年ともに 2 月 1 日から 4 月 25 日までの 12 週間のスギ･ヒノキ花粉飛散数を調査したところ、2021 年はスギが 2281 個／cm²で、ヒノキが 598 個／cm²であり、2022 年はスギが 674 個／cm²で、ヒノキが 2867 個／cm²であった。

主に問診により花粉症と診断したが、患者数は 2021 年が 834 例で、2022 年が 797 例であった。

初診数は 2021 年が 2 月 2 週～3 月 1 週に多く、2022 年が 2 月 4 週～3 月 2 週と 3 月 4 週～4 月 1 週に多かった。再診数は 2021 年が 2 月 4 週～3 月 4 週に多く、2022 年が 3 月 4 週～4 月 2 週に多かった。

両年の初診数と再診数の違いは週毎の花粉飛散数で説明できると思われた。スギ花粉の飛散が少ないのにヒノキ花粉の飛散が多い理由について、気象との関連を調べて検討した。2021 年は 8 月に豪雨があり、8 月は気温が低く、日照時間が短かったので、スギ花粉に影響を与えたと思われた。ヒノキ花粉には 6～8 月の気象の影響を受けると考えられているが、花粉飛散に 2021 年 6～7 月の気温の高さと日照時間の長さが関係した可能性がある。

【参考文献】

1）渡辺哲生、他：スギ花粉症と比較したヒノキ花粉飛散状況の検討. 日耳鼻 2020;123:139-144.

2）野田哲哉、他：長崎県大村市の一診療所における 2016 年と 2019 年のスギ花粉症患者数についての比較検討. 耳鼻臨床 2021;114:119-125.

Ⅱ-3　新型コロナ後遺症に上咽頭擦過療法 EAT と投薬にて改善した 16 症例

〇佐々野利春
ささの耳鼻咽喉科クリニック

新型コロナ感染症が出現し、3 年近くが経過しても変異を繰り返しながら猛威が続いる。その中で、感染後の倦怠感や集中力低下といったコロナ後遺症が高い頻度で発生している。コロナ後遺症は日本ではコロナ患者の 10%以上に発生すると報告され、世界中では 1 億人以上にのぼるといわれている。しかし、その病態は諸説あるも不明で、その治療法も確立しておらず、世界中の研究者や薬品メーカーがしのぎを削っている。そんな中、耳鼻科領域で日本独自の治療法である上咽頭擦過療法 EAT が効果的であるとの報告があり、一部メディアやネットでも取り上げられている。当院では開院当初より細々と EAT を続けていたが、それを見た患者が当院にも来院するようになった。

今回、その EAT に独自の漢方処方と抗ヘルペス薬及び類似薬の組み合わせで、とても良い効果が得られたので、私自身の病態仮説を加えて報告する。

【参考文献】

1)厚生労働省：新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き　別冊罹患後症状のマネジメント（第 1 版）2022 年 4 月
2)平畑光一：新型コロナ後遺症. 東京、宝島社 2021
3)堀田　修、田中亜矢樹：上咽頭擦過療法（EAT）の臨床効果から見える慢性上咽頭炎が関連する多彩な病態. 日本医事新報 2020;5007:30-36.
4)M.オルーク：コロナ後遺症が変えた慢性病のとらえ方. 日経サイエンス 2022;6:64-65.